

「百人一首宗祇抄」の研究

論文審査の結果の要旨

本論文は、藤原定家によって編まれたとされる秀歌選『百人一首』の、最古にして代表的な注釈書とされてきた所謂『百人一首宗祇抄』(以下、『宗祇抄』と略称)について、種々の観点から検討を加えたものであり、宗祇の伝記や年譜、諸本解題、研究史概観をも備えて、堂々たる一書となっている。

従来『宗祇抄』は、文明10(1478)年に宗祇から弟子の宗長に与えられた本が最初のものとして知られ、以後も宗祇は何度か求めに応じて同様の本を人に与えたことがあり、文明10年本を増補した形の本があることも知られていた。そして、内容的には、師である東常縁より宗祇へと伝授されたものであるということに、疑いが持たれることはなかった。

ところが、昭和26年に、応永13(1406)年の藤原満基による書写奥書をもつ『百人一首抄』なる一書(以下、『応永抄』と略称)が紹介されたことにより、事態は混乱することとなった。該書は、内容的には増補された『宗祇抄』とほとんど変わりがない。しかるにその奥書は、宗祇の出生(応永28(1421)年)以前のものであったからである。この奥書を信ずるならば、増補本『宗祇抄』は既に15世紀初頭には成立していたのであり、宗祇による文明10年奥書本が最古の『百人一首』注釈書であるとする通説は、根底から覆ることになる。

それ以後、研究史的には、『応永抄』に先立って『百人一首』の注釈を始めたのは誰であるか等、考察が重ねられることとなったが、新たな資料は発見されず、漠然と頓阿あたりから始まったものと見られていた。しかし近年、『応永抄』の奥書については、その信憑性を疑う意見が提出され、『応永抄』も『宗祇抄』の増補本の一つと位置付けられることとなった。それを受ける形で本論文では、改めて『宗祇抄』の内部徴証から、作者や成立の問題の解明を試みている。

本論文における最大の功績は、『宗祇抄』諸本(『応永抄』も含めて)に例外なく現れる「なまみなく」という見慣れない語(2例)が、様々な文献を博搜しても容易には見出し難いものであることを示す一方、そのような語がわずか1例ながら、文明11年に書かれた宗祇の連歌論書『老のすさみ』において同じような文脈で用いられていることを突き止めたことである(第二部・第三章・第二節)。これにより、『宗祇抄』の作者には、やはり宗祇こそが相応しいと判断する。

また、宗祇の事績と照らし合わせると、文明12年に書かれた紀行文『筑紫道記』に見える「かるかやの関」見聞の体験が、増補本『宗祇抄』における天智天皇の歌の注釈に生かされた可能性があるとする(第一部)のも、興味深い指摘である。

本論文が最も力を注いだものに、『宗祇抄』が宗祇による述作であるとして、そこに宗祇らしい特徴がいかに見出されるかについての検討がある(第二部・第五章・第二節)。26項目にわたる詳細な検討は、『宗祇抄』に肉薄しようとする意欲に溢れるものであるが、その特徴を浮き彫りにするためには、今後さらに『宗祇抄』の周辺の資料との広範な対比が求められる。

以上のような観点から、本調査委員会は、本論文の提出者が博士(文学)の学位を授与されるに相応しいと認めるものである。